

## 秋の気配

今よりは 秋づきぬらし

あしひきの 山松蔭やままつかげに ひぐらし鳴

きぬ (巻十五—三六五)

万葉集の巻十五には、天平八（七三六）年の六月に日本から遠く離れた新羅の国に派遣された人々—いわゆる遣新羅使の歌が収載されています。その数は一四五首にのぼり、出発の時の別れを哀しむ歌から、旅の途中での様々な思いを詠んだものまで、その内容は多岐にわたっています。

その中で、この歌は遣新羅使が瀬戸内海を抜け、九州の筑紫の館に到着し、遠く故郷を思って詠んだ四首の最後の歌です。なんとももの悲しく山の松蔭で鳴くひぐらしの声を耳にして、これからはますます秋らしくなっていくのだからというのです。この歌のすぐ後

に、七夕（天の川）の歌があることから、この歌も、その頃—つまり旧暦の七月になる頃（現在の八月上旬から中旬頃）に詠まれたのでしよう。曆の上ではもう秋であることは認識していたが、ひぐらしの声で、実感としても秋の訪れが身にしみるといいうのです。

遣新羅使の出発の折りの歌に「わが故に思ひな瘦せそ秋風の吹かむその月逢はむものゆゑ」（巻十五—三五八六）



福岡城趾に建つ筑紫の館の歌碑（揮毫 倉野憲司）

という歌があります。秋風の吹く月にはきつとまた会えるだろうから、私のことで思いわずらわれないようにと詠んでいるのですが、遣新羅使の人々は秋にはまた帰ってくる事ができると思っていたのでしよう。しかし、まだ新羅はおろか、やつと九州にたどり着いたところで、もう秋の気配が感じられることへの驚きと失望を感じていたのかもしれない。

筑紫の館とは、当時の大宰府のいわば迎賓館として博多湾のすぐそばに作られた施設で、海路で訪れた役人や、外国の使節の宿泊所としても利用されたようです。現在の福岡市中央区の福岡城趾にあり、かつての西鉄ライオンズや、新しくはダイエーホークス（現ソフトバンク）の本拠地として使用された平和台球場のほぼ真下及びその周辺から遺跡が見つかっています。その遺跡のすぐそばの、福岡城のお濠端にこの歌の歌碑がたっています。

（万葉古代学研究所主任研究員 松田信彦）